

随想

アフガニスタンの忘れ得ぬ人々



川^{かわ}口^{ぐち}順^{より}子^こ

米軍のアフガニスタン撤収とタリバンのカブール支配をめぐるの混乱、特にカブール空港の惨状は、心が痛んでテレビ画面を正視できない。二十年間の米軍等の駐留と日本を含む国際社会の復興支援努力はいかなる意味をもったのだろうか。

二〇〇二年五月に外務大臣として訪れたカブール

の情景が目には浮かぶ。当時のアフガニスタンは、何十年ぶりの平和が戻り、将来への希望に満ちていた。街には活気があった。国連の下で暫定行政機構ができ、治安担当のISAF（国際治安支援部隊）も機能していた。日本をはじめ各国の大使館も再開し、復興支援が始まっていた。一カ月後にはアフガニスタン伝統のロヤ・ジルガが開催され大統領が選

出されることになっていた。

到着後すぐに女学校に向かった。大きな砲弾の穴が開いている建物に入ると、薄い敷物の上に白いスカートの女生徒たちが座っていた。子供たちの年齢は、小学校低学年から高校生くらいまでまちまちである。「この子供たちはタリバンの時代には教育すら受けることができなかつたのです。今初めて与えられた機会なのです」と先生。胸を突かれた。

そして何よりも印象的だったのは敷物の外に子供たちの靴が整然と並べられていたことである。それは戦後間もない時期に私が通った日本の小学校の風景と全く同じだった。アフガニスタンの人々は貧しくても、けじめのきちんとした人々なのだと未来に明るさを感じた。なお、女学校の壁の穴は、その後日本の援助で修復された。あの女学校はこれからどうなるのだろうか。

にあったそうだ。

当時ホテルには、ずっと続いた戦乱の間海外に難を逃れていたリーダー・有識者が国家再建のために帰国し宿泊していた。電力不足の薄暗い食堂で、そうした人々に出会った。今回国外に脱出したアフガニスタン大統領、ガーニ氏にもそこで会って話した記憶がある。カルザイ初代アフガニスタン大統領も当時のアブドラ外務大臣も、アフガニスタンの将来を背負うべく、その時期に帰国した人々である。元国王も帰国していた。

アブドラ外務大臣(当時)は、その後の大統領選をガーニ氏と争い、アフガニスタン高等和解評議委員会長の議長としてタリバンとの交渉の責任者になったのだが、髪黒い精悍な面持ちの人であった。私は公式会談、記者会見の後、街を視察しNHKの収録に応じ、その足で晩餐会に向かった。満面の笑み

翌日訪れた子供たちの地雷教育の場でも、靴は整然と並んでいた。野外に薄縁を敷いて子供たちが座って、何が地雷の目印か、地雷を見つけたらどう行動するのかを学んでいた。日本の旅館の大広間の前のスリッパの乱雑さはとてもアフガニスタンの人々には見せられないと感じたものである。

夕暮れの街は生き生きと動いていた。道には土埃、建物は穴だらけだったけれど、手押し車の売り物の果物はピカピカに磨き上げられて、これまた整然と並べられていた。

夜間外出禁止令下のカブールの夜を、インターコンチネンタルホテルで過ごした。部屋の設備は壊れていて便座は二つに割れていた。一カ月後のG7外務大臣会合の折にカブールに一泊した話をしたら、他の外務大臣たちから「なんと勇敢な」と。インターコンチネンタルホテルも後日テロリストの攻撃



で出迎えてくれたアブドラ大臣と握手を交わした時、ふっとコロンのよい香りが漂った。見るとスーツもネクタイも昼間とは違う。「しまった」と思ったが後の祭り。因みに晩餐会の前菜は日本のシューマイそっくりの

一皿だった。マントウと言う名前だと大臣に教わって縁を感じた。

アフガニスタンではシーマ・サマル女性問題相(当時)とも会談する機会があったが、アフガニスタンでは「ジェンダー」という言葉を使うことはできず、「人権」という言葉で女性問題を訴えていること、自身への脅迫もあるが、気にしないで仕事を

務めていると語ってくれた。彼女も長い間パキスタンで亡命生活を送った人である。彼女はその後独立人権委員会委員長に転じた由だが、今どこでどうしているか、私にとって一番気になる人である。



米軍撤収実行段階で

の混乱は米国の失敗である。ただ、二十年を費やしてもアフガニスタンを平和と経済的前進の基盤に乗せ得なかったことについては、汚職が噂されるアフガニスタンの指導者たちやアフガニスタンの復興支援に関わった国際社会にも責任がある。日本も二〇〇一年以降アフガニスタン支援国会合を二度開催し、約六十九億米ドル（約七千六百億円、百十円で

換算）の支援をこれまでに行ってきた。「人間の安全保障」を提唱する緒方貞子さんや中村哲医師をはじめとするNGOも深く真摯に関わってきた国である。多民族国家で地形的にも山脈で分断され、ただでさえ統治が難しいアフガニスタン。私たちはどうすればよかったのだろうか。

今後アフガニスタン国民は、タリバンの下で困難な道を歩むことになる。内戦もあり得る。今回のタリバン勝利で世界各地の過激な原理主義者・テロリストたちが勢いづけば国際社会は更に不安定になる。アフガニスタン国民を見捨ててはいけない。テロリストを横行させてはならない。国際社会は今後どう対応すべきなのか、問題の大きさに圧倒される思いである。

（武蔵野大学客員教授、武蔵野国際総合研究所フェロー、元外務大臣、環境大臣、元参議院議員、東大・教養・昭40）